令和２年　決算特別委員会４日目【衛生・産経費】

↓↓↓質疑応答↓↓↓

【松澤質問】

　私からは２６９ページ、健康づくり支援事業と、２７５ページ、産後ケア事業についてお聞きいたします。

　健康づくり支援事業の中からウォーキングマップアプリ運用保守等と、健康ポイント事業運営委託等についてお伺いいたします。今年の７月に厚生労働省が発表しました日本人の平均寿命、女性が８７.４５歳、男性が８１.４１歳となります。ともに過去最高を更新いたしました。また、世界との比較でも、男性は世界第３位、女性は香港に次いで第２位と、大変な長寿国を堅持しております。また同時に、日本は健康寿命が世界一長寿社会を迎えており、今後のさらなる健康寿命の延伸も期待されております。

　こうした人生１００年時代には、高齢者から若者まで全ての人たちが元気に活躍し続けられる社会、安心して暮らすことのできる社会となることが必要であります。最も身近で手軽にできる運動として、ウォーキングが挙げられます。区民が積極的に体を動かす意識を持ち、運動する習慣を身につけるためにも、ウォーキングに取り組みやすい環境づくりが必要です。そこでまず、ウォーキングマップアプリの概要と利用者の状況についてお知らせください。

【高山健康課長答弁】

　ウォーキングマップアプリのお尋ねでございます。区民が気軽に実行できる健康づくりの１つとして散歩を推奨するために、冊子のほうも既に作っておりまして、こちら「品川ウォーキングマップ　私の散歩道」というものがございまして、これ以外にスマートフォンのアプリということで、配信のほうを平成２８年より実施しております。これまでの実績という点で申しますと、この５年間で大体１万ダウンロードぐらいございまして、年平均で申しますと大体２,０００から２,５００ぐらいのペースでダウンロードをしていただいているところでございます。機能といたしましては、先ほどご紹介いたしました冊子の内容でありますとか、あるいは歩いた距離や経路を記録する機能、そしてお気に入りの場所を登録する機能などを設けまして、多くの方に使っていただいていると受け取っているところでございます。

【松澤質問】

　分かりました。また、ウォーキングアプリと同様に、この健康ポイント事業について、歩くことに着目した事業であります。そこで、開始から３年目となる、本事業の内容と実績、利用者の反応についてお知らせください。

【高山健康課長答弁】

　健康ポイント事業についてのお尋ねでございます。こちらのほうは委員ご紹介のように３年目ということで、平成３０年度にスタートした事業でございます。区民の約７割を占めると言われております、健康づくりに無関心な層を含む多くの区民に対しまして、運動を始めるきっかけや継続する動機となるインセンティブを付与するということで、健康づくりに取り組むことを目指すものでございます。

　具体的には、参加者の方に活動量計という万歩計のようなものをお持ちいただきまして、歩いた歩数や、区が主催する事業に参加いただくことで、ポイントをどんどん獲得していっていただきまして、期間内にためていただいたポイントで順位をつけ、ランキング、そして最終的に商品券などをお渡しするものでございます。事業発足の当初は４０歳以上としていたのですが、その後は二十歳以上ということで、働き盛りの層も取り込もうということで、年齢層について拡大をいたしました。本年度は３,０００人の方に参加をいただいております。

　反応といたしましては、参加いただいて、健康の意識に変化があったという方がおおむね８割、それから事業全体に満足をされているという方が８６％ほどということで、３年目を迎えて、事業の成果について手応えを感じているところでございます。

【松澤質問】

　分かりました。８割の方が喜んでいる、これは確かにとてもいい取組みだと考えられます。先ほどポイントという話がありましたけれども、これは兵庫県豊岡市、これは市が開発した「とよおか歩子」というアプリがあります。これは設定した歩数を達成するとポイントがつく、そのポイントを小学校や幼稚園などに寄附する、１ポイント２.５円の換算で寄附金が交付されるとありました。健康無関心層を動かす方策として、しながわ健康ポイント事業と全く同じ形なのですけれども、誰かの役に立ちたいという気持ちに着目しております。先ほど高山課長からの答弁もありました。このランキング形式によるほかに負けないという競争意識も役立ち、子どもたちのために、孫のために頑張るという意欲で、初年度の８３万円から１１０万円まで寄附金が増えております。

　そこでちょっとご提案させていただきます。歩いて健康になることは大変重要であります。要介護にならない体づくりにもつながり、それにプラス付加価値をつけ、どちらもウィン・ウィンになる考え方が大切だと思いますが、ご所見をお伺いいたします。

【高山健康課長答弁】

　地域貢献と申しますか、そうした要介護にならない体づくりでありますとか、あるいは寄附などの趣旨でありましょうか、そのようなご提案をいただきました。この間の３年間の動きとしましては、健康ポイント事業も柔軟にいろいろと手を入れてきております。例えば人数を、当初１,０００人だったものを現在のところは３,０００人まで拡大、あるいは、先ほどご紹介しましたように、年齢を４０歳以上から二十歳以上ということで、年齢層についても拡大いたしました。また、なかなかこの事業に、非常に思いを入れてくださっている方もいらっしゃるので、継続して続けたいという方のお声にも応えてまいりました。委員ご提案のそのような仕組みも、利用者の声を聞きながら、今後導入できるかどうかについて検討してまいります。

【松澤質問】

　アプリやＡＩを駆使し、さらに健康に対する区民の取組みが活性化することを願い、次の質問へ移らせていただきます。

　２７５ページ、母子健康指導事業費の中から産後ケアについてお伺いいたします。先ほどつる委員からもいろいろとありましたが、これは決算書には記載がないのですけれども、厚生労働省は今年度、双子や三つ子といった多胎児の子育てに特化した支援を実施し、予算案に約２４０億円を盛り込み、一部をこの支援に充てるとありました。実は私も４人の子どもがおりまして、真ん中の２人は双子であります。その双子も小学校の４年生になりました。振り返ってみると、本当に双子のベビーカーというものは、大変に大きくて重いのです。バスには乗れません。これはたためないので電車で文句を言われる。これはもう本当にしょっちゅう言われてしまうのです。買物も行けません。どうしても通路が狭いので入れないのです。私は戸越という土地柄、近所のおじちゃん、おばちゃんに言えば買ってきてくれる、そのような関係があるからよかったですけれども、多分そのような人は少ないと思うのです。そういった部分で、やはり出かけるなと言われている方が大変多いということをお聞きしております。

　多胎児の出生件数が約９,７００件、全体の１割を占める計算となります。東京都が行った調査では、９割の親が、やはり同じように気持ちがふさぎ込む、外出・移動がつらいと答えております。多胎児への虐待死のリスクは、子ども１人の場合と比べ、２.５倍から４倍になると推計されております。そこで品川区の多胎児の出生状況についてお聞かせください。また、今年度をはじめ、既に取り組んでいる多胎児支援について、ご説明をお願いいたします。

【間部品川保健センター所長答弁】

　多胎児支援につきまして答弁させていただきます。品川区における多胎児の出生につきましても、委員ご指摘のとおり、国や都と比率は同じで約１％ということで、品川区の場合、大体３,８００人ほどの出生がございますので、年間４０件弱というような状況でございます。

　今、主な支援ですが、多胎児育児学級ということで、いわゆるふたごの会で、先輩の親からいろいろなアドバイスを伺ったりして育児不安の軽減を図っていたり、また、早産や軽体重で生まれることもありますので、そういった場合については、保健師や助産師の定期的なフォローを行っているところでございます。

【松澤質問】

　多胎児を抱えた母親、出産後数か月は授乳と泣き続けることへの対応、これはほとんど睡眠時間が取れない状態になります。このような状態に対して、自分からＳＯＳを出すことができないこともあります。時期に応じて適切な支援や配慮を行うことで、育児負担が大きくなり、孤立しがちな多胎児家庭の中で虐待予防にもつながります。多胎児家庭について、保健センターとして有効な支援策について、ポイントなどがあれば教えてください。

【間部品川保健センター所長答弁】

　やはり有効な手段ということで、先ほどもご答弁させていただきましたけれども、父親学級ということで実施をしております。やはり、育休中の夫の３割は、家事育児が２時間足らずという調査結果もございます。産後うつになる、ならないの決め手は、やはり夫やパートナーの関わりによるところはあります。私どもといたしましては、今後ともこの父親学級を通じて、母親の今までの育児で頑張ってきたことをねぎらったりだとか、感謝の気持ちを伝えて良好なコミュニケーションを担保するように努めてまいりたいと思います。